

VII 第5の神のことば 「あなたの父と母を敬え」

出エジプト 20:12、申命記 5:16

20:12 あなたの父と母を敬え。あなたの神、【主】が与えようとしているその土地で、あなたの日々が長く続くようにするためである。 出エジプト 20:12

はじめに

1. 第5の神のことば(第五戒)の位置づけ

旧約聖書において両親は子どもに対して神の権威を代表するものであり、家庭における宗教教育は、両親に課せられた重大な責任であった。(申命記 6:7)。
過ぎ越しの祭りにおける両親の子どもに関する務めも同じ6章20～21節に記されている。両親への服従は神への服従に結びつくことは、箴言にたびたび強調されている。
(箴言 1:8) これが聖書の示す人間のあるべき姿であり、親子関係の聖書的原則である。そこである人たちは、第五の教えを第一から第四に続く第一の板、すなわち神への義務の中に入れる。しかし、人への義務の中に入れ第二の板に属することを選ぶ人も多い。私自身は、第五の神のことばは二者択一の選択よりも、第一の板と第二の板の橋渡しの役割を持っていると考えている。両親への尊敬に関する教えが五番目に置かれている背景には、数々のみことばにある「宗教教育」の責任を両親に与えているという事実を尊重するからである。両親は子どもを産み、ただ育てるだけで両親としての責務を果たしているわけではない。神のみ教えを正しく教え、信仰によって養育するとき、地上における神の代行者としての親の責任を果たしたと言える。

2. 第5の神のことばの独自性

親孝行という徳目はどの文化にもある普遍的な道德訓と考えられている。孝行息子や娘は常に称賛されている。だからキリスト教も同じであると考えて、教会でもなぜこの神のことばを教えなければならないのか深く考えていない。古いどこにでもある親孝行の道德を、キリスト教の衣に包んで教えているのではないかという心配が生じる。第五の神のことばは、独自性を持ち、特殊性を持っていることを確認する。なぜかと言えば、まず初めに「母を敬え」という点で、特殊性があり独自性を持つ。「父と母を敬え」とは、父と母とを区別していないのである。古代社会では、父は絶対的な力を家族に振るい、時には生殺与奪の権すらもっていた。子どもはしばしば捨てられ、売られ、その子どもたちの運命は悲惨であった。その時代では父に対する服従は当然のことであった。しかし、母親に対して同様の服従は要求も強調もされなかった。

「母を敬え」というとき、父と同格に扱われていることは、独特で特殊であったというべきである。

親は生まれたばかりの赤子であった時から衣食住のすべてを与え、保護し、すべての

判断とその責任を持ち、何があっても尻ぬぐいをしてくれる愛情に満ちた関係であった。そのような親子の情愛を前提にした「敬敬」に値する存在であった。

人となられた主イエスは両親を敬う良き模範を示された。子どもの時から両親に仕え、「それからイエスは一緒に下って行き、ナザレに帰って両親に仕えられた。母はこれらのことをみな、心に留めておいた」(ルカ 2:51)。主イエスは十字架上で亡くなる前に、母マリアを弟子のヨハネに託されたのであった。「イエスの十字架のそばには、イエスの母とその姉妹、そしてクロパの妻マリアとマグダラのマリアが立っていた。イエスは、母とそばに立っている愛する弟子を見て、母に『女の方、ご覧なさい。あなたの息子です』と言われた。それから、その弟子に『ご覧なさい。あなたの母です』と言われた。その時から、この弟子は彼女を自分のところに引き取った」(ヨハネ 19:25)。

それ故に使徒パウロはエペソ人への手紙 6 章 1~4 節で、親子のあるべき美しい姿を示しているのである。

3. 第五の神のことはの範囲と対象への訓戒

まずこの教えの適用範囲から取り掛かる。ウエストミンスター小教理問答、問 64 の答えに、「第五戒が求めていることは、あらゆる人が、目上、目下、対等、と言ういろいろの地位と関係において持つ名誉を守り、義務を果たすことです」と記されている。すべてに適用される広い範囲を持っている。ハイデルベルク信仰問答、問 104 においても「すべてわたしの上に立てられた人々」としている。神が立てられた権威に従うことは、初代教会以来重んじられてきた基本的態度である。

また従来から、この第五の神のことは子どもより大人に命じられたものであると指摘されてきた。この教えは第一義的に子どもたちではなく、すでに成人した人々、すでに結婚し、家庭を与えられ、自分たちが父母になっている人々を対象にした教えである。

改めて、「十戒」・「十の神のことは」で象徴されている律法の定めは、成人した者、神の民として贖われた人々が自律的に参与する者たちに与えられているものであった。

幼い時から親の庇護の下に置かれ、育てられてきた子どもたちが、成人して神の教えに従って父と母から離れて一つのからだとなった夫婦が、自分たちを育ててくれた父母と向かい合い、敬い、重んじる責任を神の前で引き受ける。

今日的課題は高齢者問題であることに異論はないであろう。政府、地方行政機関、は言うに及ばず、社会福祉の面で教会も本来の使命として取り組まねばならない。そこで

西大寺キリスト教会は長年の「高齢者ケア検討委員会」の準備を経て、「NPO 法人 あい愛」を 2000 年から立ち上げてきたのである。まだまだ行き届かない小さな働きであり、地域の人々の必要に答えなければならない。

4. なぜ父と母とを重んじなければならないのか

「【主】が与えようとしているその土地で、あなたの日々が長く続くようにするためである」(出 20：12)。そして申命記にもその理由が述べられている。「それは、あなたの日々が長く続くようにするため、また、あなたの神、【主】があなたに与えようとしているその土地で幸せになるためである」(申命記 5：16)。

(1) 長く生きるこ

これは非常に興味深い教えであるがあまり説明されてこなかったように思う。なぜ父と母を敬うかとの問いがされることなく、当然のこととして軽く受けとめられてきたのではなかったか。その答えはあなたが長く生きるためだというのである。父と母を長生きさせるということではなく、自分が長く生きるための条件となると意味づける。

長く生きるということは、われわれ人間の願望によるだけでなく、神の御命令であることを忘れてはならない。

長生きは人間の単なる自然願望ではなく、命の造り主の求めであることを私ども人間は忘れているのである。われら人間は自分に与えられた生を自分勝手な生き方をすることを許されていない。まして、自分の勝手な生き方や考え方によって、自らのちを縮めるということは断じてあってはならない。

(2) 父母を重んじることは自分を重んじること

人が長く生きて行くために、父と母を敬うことが肝要なことであるのはなぜか。人はそもそも父と母との関りによって生が与えられる。父母が生んでくれたおかげで地上で人間として生きるようになった。しかも、それは父母だけの意志によるのではなく、摂理の神のご意志によるものである。神がこの私の父と母に、私を「子」としてお与えになったゆえに、私の地上の生活が始まり私の地上における個人史の営みがはじめられた。「あなたの神、主があなたに与えようとしているその土地で」というのは、以上のことを包含している。私が、太平洋戦争戦時下の 1943 年 4 月、日本の兵庫県印南郡伊保の地で、6 人兄弟の第 5 子二男として生まれ「弘之」と言う名をつけられたのは、父と母だけの意志によるものではなかった。私の存在と父母の存在は神によって深く結ばれている。私はそこで生まれ、そこで育てられてきたことに言い知れない喜びと感動がある。自分自身へのいとおしさと、それにもまして父母に対する恩愛の情に包まれる。父母を軽んじるということは思いもよらないことであり、道理に反することである。もし、父母を軽んじることがあるとするならそれは自分を軽んじることには他ならない。また、父母を軽蔑するということがあるなら、それは自分を軽蔑することと同様である。

ここで、この第五の神のことば、み教えが守りやすい教えでないことを語らねばならない。なぜか、それは親が徳にも品格にも優れているとは限らないからであり、むしろ、どうしてこんな父、こんな母の子として生まれてしまったのかと、自分の定めを呪うことすらある子どももいる。そのような場合、無理であるにもかかわらず敬わなければならない不条理な教えだと決めつけなくてよい。ひどい生育環境の中で育った子どもは、

父母を敬うどころではなく、父を憎み、母を憎むことで自分の人生のよりどころを見つけないという悲しみを背負っている。しかし、そこでこそこの教えのように父と母を重んじるということが求められている。主イエスが山上の説教で教えられたように、「敵を愛する」ことに通じている。愛しにくい父や母をも重んずるということがこの第五の神のことばに込められている。つまり、敵とは自分の父親であり、母親であるという不幸を背負って生まれてきたのである。赦せない父母を赦し受け入れることができるのだろうか。それは、生来の人間に求められない要求である。まして、敬うことなどあり得ない。主イエスはそのような愛の限界に縛られている私ども罪びとのことをよくご存じである。顧みれば私たち自身が罪深く、神の敵であった。神を重んじることもなく、神に背いたこと幾たびか。その私どもを神が重んじてくださったのである。それも、限りなく愛し続けた。

ここで、預言者ダニエルの祈りに教えられ、その真実な在り方に倣いたい。

「【主】よ。顔をおおう恥は私たちにあり、私たちの王たち、首長たち、および先祖たちにあります。私たちはあなたに対して罪を犯してきました。あわれみと赦しは、私たちの神、主にあります。まことに、私たちは神に逆らいました」(ダニエル 9:8~9)。

私たちも父母を憎む罪にきずかされ、その罪を神に告白して悔い改め、神の赦しを求める祈りをする。加えて、親の罪、先祖の罪を告白し、赦しを求め身代わりの祈りをささげるのである。その祈りは続く16~17節に記されています。「主よ。あなたのすべての義のわざにしたがって、どうか御怒りと憤りを、あなたの都エルサレムから、あなたの聖なる山から去らせてください。私たちの罪と私たちの先祖たちの咎のゆえに、エルサレムとあなたの民が、私たちの周囲のすべての者にとってそしりの的となっているからです。私たちの神よ。今、あなたのしもべの祈りと願いを聞き入れ、主ご自身のために、あなたの荒れ果てた聖所に御顔の光を照り輝かせてください。

むすび

父と母への敬愛を教える第五の神のことばは、崇拜されるべきお方はまことの神以外にはないと教える第一の神のことばと深く結びついている。父母が神の領域を犯す場合、親を神に祭り上げてはならないのである。「敬愛」と「崇拜」を混同してはならない。また、為政者に対する絶対的服従の根拠ではなく、時の権威者の神格化や、無批判で絶対的な盲目的服従を教えるものではない。両親同様、この世の権威に従うのは、彼らが神に立てられて神の御心を行っているときに限って、という「限界設定」があることを肝に銘じるべきである。

「第五の神のことば」(第五戒)は「第四の神のことば」に続いておかれている。前半の四つの神のことばは神に関する教えであり、後半の隣人関係の教えとの間に置かれている理由がうなずけるのではないだろうか。